

(別紙2)

審査の結果の要旨 氏名 木村 覚

本論文は、I・カントの美学的思考を、とりわけ彼が『判断力批判』(1790)において主題とした「反省的判断力」の働きに即して、通時的かつ体系的に明らかにしようとするものである。第一部は『判断力批判』に先立つ論考・講義録・遺稿に見られる美学的思考を検討し、第二部は批判期のカントが自らの美学的思考を展開した『判断力批判』第一部「直感的判断力の批判」の詳細な分析を行う。

第一部第一章において著者は、批判期以前のカントの二つの論考「美しいものと崇高なものの感情に関する観察」および「脳病試論」の分析をとおして、思考において他者の立場を顧慮する社交性に対するカントの関心を浮き彫りにし、そこに批判期の『判断力批判』につながる論点を読み取る。第一部第二章は1772年から1789年までの人間学講義録を検討しつつ、「趣味」と「規則」、心的能力の「調和」、および「共通感官」という三つの論点に即して『判断力批判』の成立史に光を投げかける。

『判断力批判』第一部「直感的判断力の批判」は「美しいもの」と同時に「崇高なもの」をも主題とするが、こうしたカントの二分法を踏まえて、本論文第二部は第一章において「美しいもの」に関するカントの議論を、第二章において「崇高なもの」に関するカントの議論を対象とする。筆者によれば、「直感的判断力」は自己の内に判断の原理を有しており、それゆえに自律的であるにもかかわらず、常に超感性的なもの・道徳的なものとかかわり、このかかわりが「直感的判断」の公共性を支える。筆者は、こうしたかかわりのもとにおいてのみ、人々は自らの直感的判断の正当性をめぐって相互に争いつつも、究極的には一致した判断にいたることを希望しうる、とカントの議論をまとめる。このように、美学的な議論の内に含まれる道徳的な側面を炙り出し、「美」から「道徳」への「移行」をめぐるカントの論述の内に「私」から「われわれ」が生成する機構を読み取る点に、本論文の特色がある。

膨大な資料を読みこなした成果を論文に反映させるために筆者はときに不要な議論に立ち入り、そのため細部に未整理な論点が残されている。また、引用文の解釈に強引な点が散見され、そのために議論の道筋が必ずしも明確とはなっていない箇所がある。とはいえ、先行研究をも視野に収めつつ、『判断力批判』の成立以前のカントの美学的著作・講義録・遺稿を一貫した視点から読解し、『判断力批判』を「美」から「道徳」への「移行」の問題に即して体系的に解釈しようとした点は、筆者の力量を十分に示している。以上に基づいて、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。